

# 「Joy to the World」

## ルカ2章1節－7節

私達は来週、クリスマス控えています。今日も世界中の教会でクリスマスのメッセージが語られています。これからクリスマスの当日までの一週間の間にいったい何回、世界中で Joy to the World が歌われるのでしょうか。クリスチャンであろうとなかろうと Joy to the World のメロディーを私達は知っています。日本のスーパーのお総菜売り場でも、もしかしたらパチンコ屋でもこの歌は流れています。

今日はなぜ Joy to the World なのか、そう、「この世界に喜びが訪れた」ということはどういうことなのかということ、三つのことからお話しします。まず、最初にお話しすることは、この出来事は「歴史上の出来事」であったということです。

### 歴史上の出来事

この出来事の記録が書かれていますルカ2章1節－7節をまず読んでみましょう。

そのころ、全世界の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウグストから出た。② これは、クレニオがシリアの総督であった時に行われた最初の人口調③人々はみな登録をするために、それぞれ自分の町へ帰って行った。

今日、私たちの前に開かれているルカ伝はその書の名の通りルカという人によって書かれました。ルカは医者でした。医者が患者を前にカルテを取る時に、まず最初にするは何でしょうか。カルテの名前が本人だということを確認し、その日の日づけを書き記すに違いありません。私達が大切な書類にサインをする時も、私達はそこに日づけを書き記します。時にそのことに気がつかず、怠ったりすると、後でその書類が無効になってしまうことすらあります。「時」を記すということは、“確かにこのことは起きました”ということを示す、歴史の中に刻まれた目印のようなものです。

2016年12月18日(日)「Joy to the World」

ルカもその仕事柄でしょう、その出来事がいつ起きたかということに対して、とても注意深い人でした。彼は日づけこそつけませんでした。明らかに「その時」に対して明確な歴史的な位置づけをしており、そのためにその時の皇帝と総督の名前をここに書き記しています。これらの人たちの名前は聖書以外の文献にも出てくるもので、確かに実在した人達であり、ルカがこのように歴史的な人物を明確にすることにより、ここに記されている出来事、すなわちイエス・キリストの誕生はおとぎ話なのではなくて、この世界の歴史に刻まれているものなのだとすることをルカは強調しているのです。二つ目の出来事です。それは「人間生活の出来事」ということです。この続きを読みましょう。

### 人間生活の出来事

③人々はみな登録をするために、それぞれ自分の町へ帰って行った。  
④ヨセフもダビデの家系であり、またその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出て、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。

⑤それは、すでに身重になっていたいいなづけの妻マリヤと共に、登録をするためであった。⑥ところが、彼らがベツレヘムに滞在している間に、マリヤは月が満ちて、

⑦初子を産み、布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた。客間には彼らのいる余地がなかったからである。

この聖書箇所はイエスの父ダビデと母マリヤが全世界の人口調査をせよとの皇帝アウグストから出された勅令に従ってベツレヘムに向かう場面です。申しましたようにルカは医者です。医者ですから彼は日々、体の具合の悪い人に向き合うことを仕事としていたことでしょう。私は医者ではありませんが、おそらく医者が患者と向き合い、その病気を診察する時に、色々なことを患者から聞くとおもいます。「どこが痛いのですか?」「腰を痛めています」「どうしたのですか?」「この不景気ですし、税金も上がりましたから人を雇えず、自分と家族だけで朝から夜遅くまで働いてました。その無理がきているのだと思います」。このような会話によりルカは病気の背後にある患者の生活環境というものに敏感になっていたことでしょう。

2016年12月18日(日)「Joy to the World」

ですからルカはまず「その日」を明確にしてから、その時の「社会情勢」というものを記しています。すなわちこういうことです。皇帝アウグストが全世界の人口調査をせよという勅令を出したということです。皇帝の勅令は絶対的なものですから、その勅令はイスラエル全土に伝えられ、実際にその人口調査がなされました。この人口調査には主に二つの意味がありました。一つは確実に人頭税を徴収すること、もう一つは兵役として仕える男の数を調べることでした。

当然、この皇帝アウグストの勅令に対して、一労働者のヨセフの願いや事情などが反映されるわけではなく、ヨセフはその決定に従わねばなりません。ですから彼はそれまでしていた家業である大工の仕事を中断し、住民登録をするためにベツレヘムに旅に出なくてはなりませんでした。ナザレからベツレヘムには距離的には三日ぐらいかかります。分かりやすくいいますと私達がロサンゼルスから日本国領事館まで歩いて登録に行くようなものです。

そしてヨセフの場合、ただ仕事を中断するというだけでなく、間もなく臨月を迎える妻マリアが共にいたのです。長い旅を彼女も一緒にしなくてはなりません。身重の女性にとって、言うまでもなく過酷な旅です。いつ出産がなされてもおかしくないという妻を連れて、ロサンゼルスまでロバで旅行しようという人はいないでしょう。しかし、それが皇帝の勅令であるならば、絶対服従なのです。

皆さん、この類のことは今日の私達の生活にもあります。私にも覚えがあります。かつて自分や家族のビザのことで、私は毎日のように米国移民局のウェブサイトを見ていたことがあります。それで気がついたのは、ビザに関するルールというのはちよくちよく変わるということです。それまで準備していたことが、ある日、突然有無を言わずに無効になってしまうようなこともあるのです。

私達がグリーンカードの申請をしている時、次男坊は乳児で、他の子供もヨチヨチ歩きをしていました。そんな子供達を連れて、家族総出でチュラビスタの移民局に何度も通いました。

ご存知の方もいると思うのですが、あそこでは入り口で荷物検査を受け、銃をもったガードが常駐しています。また、あの室内で飲食が禁じられています。まさしくその場所は重々しい権威で満ちています。しかし、幼子には権威などは分かりません。お腹が空けば機嫌が悪くなり、泣きます、ぐずります。でも移民官は表情を変えず

2016年12月18日(日)「Joy to the World」  
に厳しい監視をしています。そこで家内はトイレに行き、隠し持っていたお菓子を扉の向こうで子供に食べさせました。

ビザを受け取る側に私達はおりますから、そのために私達は理不尽と思えることでも、忍耐をもって国が命じることに従わなければならないのが私達の現実です。でも、世界の他の国に比べますと、アメリカはまだまだいいのです。到底、受け入れられないような国の政策により、息絶え絶えとなっている人達は这个世界に今もたくさんいます。

私達の住むこの国に絶対的な権威を持ち、自らを神のようにふるまう皇帝はいません。しかし、どうでしょうか。株価の変動や企業のリストラというようなことはある日、突然やってきます。それはまさにアウグストの勅令のようなものです。それによって、私達の生活は揺さぶられます。ある場合には企業の再編によって、またある場合には突然の天変地異によって、人は安定した生活を後にして、私達は住み慣れた地を離れなければならないこともあります。これらもアウグストの勅令のようなもので、这个世界には私たちの願いや意志とは関係のない強い風が常に吹いているのです。木の葉が風に吹かれてしまうように私達にも時にこの暴風が吹いてくるのです。

ルカは日づけを記しました。そして、ヨセフの自分ではどうすることもできない現実の生活を書きました。そして、その彼らの生活のただ中でイエス・キリストは生まれたのです。母の胎にいたイエスは口バが歩く振動に揺られながらベツレヘムに行き、そこでは一夜の温もりを与えてくれる宿はなく、馬小屋で牛や羊が見守る中、生まれ、適当な寝台などありませんから、丁度、人の子が寝かされるのにはいいサイズの飼料おけに寝かされました。これ以上、人間の生活をあらわしている現実というものがありますでしょうか。

しかしながら、このような人間生活のただ中にイエス・キリストが生まれたことには神の御心がありました。どんな御心でしょうか。そう、それは私達に対する神の御心です。ヘブル4章14節-16節はその神の計画をこのように説明しています。

14さて、わたしたちには、もろもろの天をとおって行かれた大祭司なる神の子イエスがいますのであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。

2016年12月18日(日)「Joy to the World」

15この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。

16だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか(ヘブル4章14節-16節)。

この後、この若い夫婦と幼子イエスはエジプトに逃れていきます。そう、その様は避難民です。そして、エジプトから戻り、ガリラヤのナザレという町に暮らし始めます。どうやら父ヨセフは早くして亡くなったようで、イエスは長男として父の仕事であった大工をしながら、家族を支えていたようです。当時、建設会社などありませんでしょうから、イエス様はナザレの町でハンディーマンのようなことをしていたのでしょう。イエス様が語られたたとえ話の中には給料の話や利子の話、家を建てる時の予算などの話がでてきます。これらは全てイエス様の生きた暮らしの中でイエス様が実際にご自身、体験なさったことなのでしょう。

確かにイエス様はクレジットカードの詐欺にあうことはなかったでしょう。働いていた会社が倒産するというようなことや、車を盗まれたりというようなことはなかったでしょう。しかし、イエス様が経験されたことは、私達が日々、直面していることと同じだったのです。

そのような意味でこのヘブル書が言いますようにイエス様は私達と同じ試練を通られたのです。父なる神もイエス・キリストご自身もそこに身を置くことをよしとされたのです。

あなたは涙を流したことがありますか？ キリストも涙を流されました。あなたは裏切られたことがありますか？ キリストも裏切られました。あなたは空腹や喉の渇きを覚えたことがありますか？ キリストも空腹と喉の渇きを覚えられました。あなたは不正な扱いを受けたことがありますか？ キリストも不正な扱いを受けられました。あなたは痛みを苦しんだことがありますか？ キリストも痛みを苦しまれました。あなたは苦悶したことがありますか？ キリストも苦悶されました。あなたは愛する者をなくしたことがありますか？ キリストも愛する者をなくされました。あなたは拒絶されたことがありますか？ キリストも拒絶されました。

2016年12月18日(日)「Joy to the World」

イエス・キリストがマリアの子として生まれた理由は、ただいくつかの点においてということではなく、あらゆる点で私達のようになることにより、私達が日々、直面している諸々の事柄がどのようなものであるかということをご自身が身をもって経験するためであったのです。三つ目の事をお話しします。それは「天の出来事」ということです。

### 天の出来事

皆さん、ここまで私達は歴史に記録され、私達にも共感できる出来事というのを見てまいりました。私達にもとても理解しやすいことです。しかし、それと平行して、聖書は天の啓示というものを記していることにも気がつきます。そう、その時、野宿をしていた羊飼いに御使いが現れてこういったのです。

「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。今日、ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。

この方こそ主なるキリストである。あなたがたは幼子が布にくるまって飼葉桶に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」(ルカ2章10節-12節)。

この言葉を伝えた者は人間ではなく、み使いだと聖書は記しています。このことは明らかに私たちの日常とは全く一線を画すことであり、このようなことに関して私達もまるでおとぎ話のようにこの話しを受け止めます。医者として冷静にこの出来事が起きた時を書き記し、その時の社会背景を記録したルカはなぜこのような理性を超えた出来事を書き残しているのでしょうか。答えは一つしかありません、そうです、その出来事は実際に起きたからです。

私達は今、ルカという作者が書いた小説を読んでいるのではありません。開口一番、「はじめに神は天と地とを創造された」(創世記一章一節)と聖書が記している限り、人間の理解とか能力をはるかに凌駕している神について記している書物が聖書なのですから、私達が頭で分かるようなことだけを記しているようでは、それはおかしいのです。このイエス・キリストの誕生は確かに歴史に刻まれた出来事であり、イエス・キリストが生きた暮らしというものを書き

2016年12月18日(日)「Joy to the World」

記していると同時に天と交錯するような出来事も書かれているのです。

御使いは「あなたがたは幼子が布にくるまって飼葉桶に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」と言いました。御使いはここで「飼葉桶で布にくるまって寝かしてある幼子」を強調し、それが「私たちに与えられるしるし」だと言いました。飼葉桶に布でくるまれた幼子の何が私達に与えられる「しるし」なのでしょう。

実はこの「布にくるまる」という言葉ですが、この言葉がイエスと関係してもう一度、新約聖書の中に出てくることをご存知でしょうか。そのもう一つの言葉を使った人もこのルカでした。ルカ23章53節にはこう記されています。「それを取り下ろして亜麻布に包み、まだ誰も葬ったことのない、岩を掘って造った墓に納めた」。

この言葉が何を意味しているかお分かりかと思います。そうです、後に成人となったイエス・キリストは十字架につけられ死なれた。そして、それを取り下ろして、彼が生まれたばかりの時に布にくるまれて飼葉桶に寝かされたように、亜麻布に包まれたのです。

さらに当時の慣習というものを調べていきます時に分かってきますことは、この家畜小屋というものの多くは、町のはずれの洞窟のようなところであったと言われているということです。クリスマスのポストカードの多くはこの小屋を木で造られた建物として描いていますが、考えてみれば自分の住む家を建てることさえ難儀する時代の貧しい庶民が、わざわざ家畜のために家を建てるということは稀で、彼らの多くは自然のほら穴に細工をして家畜を飼っていたというのです。ですから、この時イエスが寝かされていた場所というのもほら穴のような場所ではなかったかと言われている。そして、そのことを思う時に、私たちは再び先ほどのルカ23章の記録を思い起こすのです。「それを取り下ろして亜麻布に包み、まだ誰も葬ったことのない、岩を掘って造った墓に納めた」と。

さらにこの時に東の国の博士達が、飼葉おけに寝かされている乳飲み子イエスの元に何を携えてこられたかということをお考えください。彼らは黄金、乳香、没薬をイエス様に捧げたとマタイは書き記しました。このうちの没薬とは人が死ぬ時に体に塗るものです。この時から33年後に、葬られたイエスのところに女性達は何

2016年12月18日(日)「Joy to the World」

を持ってやってきましたか？ルカはこのように記しています「週の初めの日、夜明け前に、女たちは用意しておいた香料を携えて、墓に行った」（ルカ24章1節）。この香料は没薬のことです。

イエスが誕生した時に「布に包まれた」ということ、「洞窟で生まれた」ということ、「没薬が送られた」ということ、それは何のしるしなのでしょう。そうです、キリストは生まれた時から既に私達の罪のために十字架にかかって死なれるということを身に負っていたということです。御使いは、そのしるしについて語っていたのです。

アドベントに入り、私達はクリスマスのメッセージに目を留めています。ここにいたる前は人間の失敗についてみてまいりました。創世記が最初の11章で既に人類が三つのテストに失敗したということ、すなわちエデンの園、ノアの洪水、バベルの塔において人間はその赤裸々な姿を明らかにしたということ、そしてその様は以後、今も全く変わらず、これからもとんでもないことをし続けていくというのが聖書が言うことなのです。

これら人間が引き起こす問題の根源には我々一人一人が持っている罪の問題があり、またそんな私達は必ず死ななければならないという宿命を負っています。私達はその無常さに打ちひしがれ、ある者はその死を恐れつつ、生きています。

このような人間世界のただ中にイエス・キリストは来られ、その人間が抱える現実を全て経験され、我々の罪の身代わりとなって十字架の上で殺され、そして我々が抱く恐れのある死を打ち破り、復活されたと聖書は記しています。すなわち、これからそのようなことを成し遂げるこの幼子が私達のためにお生まれになったということが、神が私達に与えておられるしるしなのだと言ったのです。それはある時代のある民族にだけに与えられたものではなく、それは全ての民に与えられるものなのだ、それは大きな大きな喜びなのだと言ったのです。

神は人の歴史の中、人間の汗と涙で満ちたこの世界の只中にある飼葉桶に寝かされている幼子の上に御自身の御心を示されたのです。私達の目に浮かべることができる、理解できるその日常の出来事、ただ中に神様がしるしを示されたのです。それは「この世の出来事」と「神の御心」、すなわち「この世の苦しみ」と「神の愛」が

2016年12月18日(日)「Joy to the World」  
一つとなった時のことであり、それがイエス・キリストの誕生だったということです。

そして、ここまでのことを思いめぐらしますのなら、この地と天の間に立ちうるお方はお一人しかいないということが分かります。

『神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである』(テモテ第一の手紙2章5節)。そうです、この世界にもし神と人との仲保者となりうるお方がいるとしたら、神の子でありながら、人の子として馬小屋に生まれ、我々と同じところを通り、我々のために十字架にかかり、我々のために復活された主イエス・キリスト以外にいないのです。そして、その誕生にも、十字架にも、復活にも、私達に対する神の愛が満ち溢れているのです。このことゆえに私達は「Joy to the world」、「喜びがこの世界にもたらされた」と歌うのです。

『この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。』

だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではないか』(ヘブル4章15節-16節)。

このことゆえに我々はこのクリスマスを喜びましょう。そして2016年のクリスマス、このキリストの愛をあなたもいただきませんか。お祈りしましょう。